

問三 傍線部①「そういう神業のようなこと」の内容を説明した次の一文の空欄部X、Yに当てはまる漢字二字の熟語をそれぞれ本文中より抜き出して答えなさい。

複数の意味を持つ（ X ）の語を耳にした瞬間にその状況にふさわしい（ Y ）を思いうかべて意味を確定し、相手の発言をあやまりなくとらえること。

問四 傍線部②「きわめてちかい関係にある同音語のばあいは、聞きわけはしばしば不可能である」とありますが、この具体例として最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 先生が、「アメが欲しい」とおっしゃったのだが、「飴」を食べたいのか、「雨」を求めているのかが分からなかった、ということ。
 イ 先輩が、「ジシンがあつたんだが」と言ったのだが、「地震」があつたのか、それとも「自信」があつたのかが分からなかった、ということ。

ウ 弟が、「お兄ちゃん、ニジだよ」と言ったのだが、「虹」が出ているのか、「二時」になったのか、どちらを言おうとしているのかが分からなかった、ということ。

エ 友達との会話の中で、「俺の兄貴、シリツの中学校に行ってるんだよね」と言われたとき、「私立の中学校」なのか、「市立の中学校」なのか分からないかった、ということ。

問五 傍線部③「まぎらわしい同音の語がふえる」とありますが、どうして日本人はまぎらわしい同音の語がふえても困らないのですか。その説明として最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本人は、同音の語でも、それを表す漢字が違えば異なる意味で用いるという共通理解があるから。

イ 日本人は、同音の語が新しく使われ始めると、古い方の言葉は使わないようにしようとするから。

ウ 日本人は、同音の語であるうが、相手の表情や口調から意味をある程度限定することが可能だから。

エ 日本人は、同音の語を聞いたとき、漢字に置き換えなくても意味を理解することができるから。

問六 傍線部④「かげがかさなった時」とは、どのような時ですか。答えなさい。
 問七 傍線部⑤「日本語は『転倒した言語』であると言わねばならない」とありますが、どうして筆者はそうように述べているのですか。本文中の言葉を用いて説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合で原典を一部変更しています。

歌練習の時間になっても、私は前に立たなかった。増田君が一人の前に立って、不安そうな顔をしながらテープを流している。もちろん、誰も歌おうとしない。楽譜を開けようとすらしない。私は自分の席からその「コウケイ」をぼんやり見ていた。

「みんながやらないから 捌ねてるんじゃないの」「無責任よね」

みんなが文句を言いはじめた。仕切れば文句を言い、やらなくても文句を言う。みんなはいつたか私にどうしてほしいのだろうか。前田先生は「どうしたの？ 早くしなさい」と私に注意をした。

どうして私はこんな思いをしているのだろうか。どうして毎日みんなに責められないといけないのだろうか。確かに私は学級委員だ。だけど、これは私の仕事だろうか。これが私のやらなければいけないことなのだろうか。どうして前田先生は本気でみんなに注意してくれないのだろうか。生徒の主体性を伸ばすためとか、自治能力を付けるためとか、そんな教師の逃げだ。そりゃ、みんなの前を向けたら理想的だ。でも、それには教師のバックアップが必要だ。何もないのに、私が前に出たって、どうしようもない。

みんなの苦情がだんだん増えてくる。「どうしたの？」って言う※1 智恵や道代の声もする。「早く出てきて始めなさい」先生の「ゴキも強くなる。だけど、どの声もテープの伴奏のせいで遠くに聞こえた。

その時だ。増田君の大きな声が響いた。今までこの教室の中では発せられることのなかった増田君の大声。

「お前ら、中原をいじめるな！」

教室は一瞬静まった。誰もが増田君の方を見た。

「僕たちだって、こんなばかばかしいことやりにたくないんだ！」

増田君は教卓をどんどん叩きながら叫んだ。そして、静まった教室

にどつと笑いが起こった。みんな手を叩き、笑い声を立てている。おとなしい増田君の怒る姿が面白いのだ。普段声を発しない増田君は、怒りなれていないから、怒鳴り方が滑稽だ。声は裏返り、動きがB ぎこちない。

「なにがおかしいんだよお」

増田君が怒れば怒るほど、笑いは広がる。もう止めようがなかった。増田君の友達や智恵や道代までもが笑っている。

もうだめだ。どう動いてもだめなんだ。私と増田君じゃだめだ。私達にはクラスを動かせない。私には①この役割は果たせない。私はそう確信した。

「もう。俺は交流会で三組が失敗したら悲しい」

梅雨がちゃんと始まっている重い雲の下、※2 大浦君が言った。

夕方の駅は人も多く、じとじとして気持ち悪い。降るなら降るで、ざあつと雨が来た方が気持ちいいのに。

「佐和ちゃんがさ、そういう風に悲しいのだからだ」

「誰よ佐和ちゃんって。気持ち悪いな」

② うまく行かない学校生活のせいで、私は苛々していた。

高校生活の悩みのメインは残念ながら友達関係だ。家族がぐちゃぐちゃであろうが、兄が死にかけようが、梅雨のせいで頭が重くならうが、そんなこと友達関係に比べたらどうでもいい。こんなつまらないことで悩みたくなかない。そう思うけど、どうあがいたって、一日の半分を私は三組で過ごす。みんなと仲良くする要領の良さも、三組を切り離してへらつとできる強さも私にはない。

「お前、正面から挑みすぎだぜ。同じ年代の奴を動かすのって、心底愛すべきお調子者か、尊敬せざるをえない※3 カリスマ的能力を持つか、本気で強いのか、バックに何か付いているか。じゃなきゃ、無理だ

って」

「そんなこと、とつくにすっかり勘づいてるわよ」

「だったら、もうちょっとうまくやればいいじゃん」

「これでもうまくやろうとしてるわよ。だけど、どうすればいいのかわかんないの」

この二週間、私なりに努力したつもりだ。どうしたってうまくいかないのだ。

「もう、仕方ないなあ……。本当は俺、まじで、中原に惚れてるから嫌なんだけど、秘策を、デンジコしてやるよ」

「秘策？」

一生懸命みんなに訴えてみても、役割を放棄してみてもだめだった。まだ他に方法があるのだろうか。③私は大浦君の顔を見つめて言葉待った。

「三組全員に話しかけたってだめだって。三十八人全員がお前の言うこと聞くんなんて、ここまでこじれたらもう絶対無理だな」

「じゃあ、どうすればいいの？」

「お前、女だろう？ それをいかすんだ」

「どうやって？」

「強くて、クラスで力持つてる男。そういう奴らを味方に付けるんだ。三組だったら、そうだなあ、吉沢か、三宅。そこから落としていくんだ。二人とも女子にも人気あるから、あいつらが味方になってくれたらかなり力強いよ。うん。あの辺がお前についたら、三組なんて簡単に動かせる」

「それはそうだろうけど。でも、三宅君や吉沢君が私の味方になってくれるわけじゃないじゃん」

味方どころか、三宅君も吉沢君もまるで歌の練習には参加していなかった。

「それは簡単だよ。弱々しく、『あのさ、三宅君、私どうしていいかわかんないだ。助けて』ってなことを言うんだって。お前、日頃きちつとしてるから、ちよつと弱みを見せれば絶対ほろりつて来るはずだぜ。もう男なんて単純だから、頼られれば悪い気しないんだって。三宅にしても吉沢にしても絶対協力してくれるって」

「えー。なんか気持ち悪いよ」

「そんなこと言ってる場合じゃないだろ？ 後二日で交流会だぜ」

「わかつてるけど……」

「失敗したらきつと、お前はもつと悲しくなるよ」

そうだろうか。交流会で三組が失敗したら、私はどんな気持ちがあるだろう。今はそれはわかんない。だけど、こじれた学級を何とかするためならなんでもできそうな気がする。うまくやる自信はないけど、何もしないよりはましかもしれない。

「うん。やってみる」

「そうそう。絶対うまくいくぜ。でも、一回だけだからな。俺の彼女だってこと、忘れるなよ」

次の日、いつもより朝早く登校すると、サッカー部の朝練を終えた吉沢君が一人で教室に戻ってくるのを見つけた。

「吉沢君」

「何？」

「ちよつと、いい？」

「いいけど、何？」

「三分だけ。ちよつと来て」

私は吉沢君を四階に上がる階段まで連れて行った。ここならめったに誰も通らない。

「どうしたの？」

日頃、話すことがほとんどない私に引つ張られて、吉沢君は困惑していた。

「あのさ……。えつとね」

私は頭の中で、昨日、大浦君と練習した台詞を思い出してみた。えつと、私困っていて、助けてほしいの。吉沢君が頼りなの。一人じゃ無理だから。そうやってごちゃごちゃ考えてたら、なんだか涙が出てきた。情けないなあ。みんながちゃんと歌ってくれないからってなんなんだろう。そんなことでどうしてこんなに悩まないといけないのだろう。大浦君まで巻き込んで、こんなのもつともだめだ。

「そうだよな……。中原傷ついてるよな」

なかなか言葉を発しない私に、吉沢君が言った。

「へ？」

「毎朝、俺、みんなと一緒にふざけてるけど、中原のこと本当、かわいそうだなあって思ってたんだ」

「……そうなんだ」

「ごめん」

「ううん。いいんだけど、えつと、あのね」

「わかつてる。俺、協力するよ」

吉沢君はそう言つて、私の肩を軽く叩いた。

「俺に相談してくれてありがとう」

「あ、うん」

「他にも男子いるだろう。なのに、中原が俺を選んでくれたって、なんかちよつと嬉しい」

「ああ、そう？ うん。そうなんだ」

「行こうぜ、教室」

吉沢君は階段を下りはじめた。

「えつと、あの、吉沢君だったら、格好いいし、みんなの人気者だし、だから、きつと助けてくれるって……」

大浦君と練習したことを少しはいかさないとイケない。私が慌てて言葉を付け加えると、

「わかつたから大丈夫だよ」

と、吉沢君は笑った。

④増田君と違つて、吉沢君は上手だった。みんなに「ちゃんとやろう」なんてかつたることは言わず、「毎日テープ流されちゃうから、俺、この歌覚えちゃったよ。ちよつと、いつべん歌ってみようかな」とへらへらちゃかしながら、歌いはじめた。

「どうどう、俺の歌？」

「dケツコウ、うまいじゃん」

「だろ？」

格好いい男子は歌もうまい。吉沢君は確かに上手だった。西田さんみたいな気の強い女子は格好いい男子には弱い。吉沢君達のグループの歌にご機嫌に手拍子している。

「っていうか、考えてみたら明日交流会じゃん。ちよつとやばくない？ みんなちよい、まじで歌おうぜ。中原、もう一回テープ初めから流して」

「あ、うん」

私は伴奏をもう一度流した。

誰か声を出す人間がいれば、合唱は成功する。どこかでやらなきゃと思っていた子達は、吉沢君の働きかけでようやく声を出すことができた。みんな毎日伴奏を聞いていたのだ。すんなりと「ふるさと」は歌い上がった。

〔語注〕※1 智恵や道代……「私」の高校の同級生。

※2 大浦君……「私」と交際をしており、同じ高校に通っているが、クラスは違う。

※3 カリスマ的能力……尊敬され、人を従わせることができるような能力。

問一 波線部 a・d のカタカナを漢字に直しなさい。

a コウケイ

b ゴキ

c デンジュ

d ケツコウ

問二 傍線部 A・B の意味として最も適当なものを次のア～エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A 「拗ねてるんじゃないの」

B 「ぎこちない」

ア いじけてるんじゃないの

ア 大げさである

イ あきらめてるんじゃないの

イ 不自然である

ウ 取り乱してるんじゃないの

ウ 単純である

エ 怒ってるんじゃないの

エ 不思議である

問三 傍線部①「この役割」とありますが、具体的にはどのような役割ですか。三十字以内で答えなさい。

問四 傍線部②「うまく行かない学校生活」とありますが、その原因について「私」が自分自身で思い当たっている一文を、傍線部以降の本文

中からさがし、はじめの五字を抜き出して答えなさい。

問五 傍線部③「私は大浦君の顔を見つめて言葉を待った」とありますが、このときの「私」について説明したものとして最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大浦君が本気で合唱を成功させようとしていると感じたので、自分の限界を感じてはいたが、どんな「秘策」でも受け入れようと思っ

ている。

イ 大浦君の態度がいつになくまじめだったので、やるべきことは全てやったと思いながらも、良い「秘策」があるにちがいないと確信し

ている。

ウ これ以上できることがあるのか疑問に感じながらも、大浦君が自分のことを真剣に考えてくれるので、大浦君の「秘策」に期待をして

いる。

エ 大浦君は自分のために「秘策」を一生懸命考えてくれているが、今までそれが全てうまくいかなかったため、大浦君を少しずつ信頼で

きなくなっている。

問六 傍線部④「増田君と違って、吉沢君は上手だった」とありますが、この二人の「違い」を説明したものとして最も適当なものを次のア～エ

から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 増田君は自分の考えを主張しただけだったのでうまくいかなかったが、吉沢君は状況に適した行動で級友たちの心をつかんだのでう

まくやれた。

イ 増田君はおとなしく友人の数も少なかったためうまくいかなかったが、吉沢君は明るい性格で日頃から級友たちに信頼されていたので

うまくやれた。

ウ 増田君は口数が少なく怒ってもこわくなかったためうまくいかなかったが、吉沢君は活発で力が強く級友たちから恐れられていたので

うまくやれた。

エ 増田君は責任感が強くすぐに結果を出そうとしたためうまくいかなかったが、吉沢君は気楽な立場で級友たちをじっくりと説得したの

でうまくやれた。

問七 二重傍線部「どの声もテープの伴奏のせいで遠くに聞こえた」とありますが、このときの「私」の心情を説明しなさい。

問八 本文における「私」についての説明として最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 合唱の練習に協力してくれない級友との関係に悩み途方に暮れていたが、最も頼りにしていた大浦君から「秘策」を教えられたとき、

合唱を成功させることができそうだと自信をもつことができた。

イ 大浦君から教えられた「秘策」を用いたがうまくいかず悩んでいたところ、吉沢君が新しい手立てを考えてくれたため、合唱の練習も

順調に進み、学級委員としての責任を果たすことができた。

ウ 級友が合唱に協力してくれないのは自分への不満があるからだと思い悩んでいたが、交流会が近づくにつれて自分に協力してくれる人

がたくさんいることに気づき、悩む必要などなかったのだと安心した。

エ 交流会にむけての合唱の練習がうまく行かず、級友や先生から責められ心が沈んでいたが、何とか合唱を成功させたいという気持ちちか

ら、わらにもすがる思いで大浦君が教えてくれた「秘策」を試すことにした。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合で原典を一部変更しています。

人間は、自己反省といって、自分で自分のことを検討して反省したり、また自己激励といって、自分で自分をほめたりすることができま

す。みなさんも、人に話したくないような失敗をしたり、人に話したくないような決心をしたりすることがあるでしょう。人に話して叱られたり笑われたりするのがいやならば、自分でそれを検討し、自分で自分を叱ってなおさなければなりません。「おまえはあのとときあれに気がつかなかつたから失敗したんだよ。もっとよく考えればよかったんだ。」と、自分で自分にいつて聞かせます。「やるのならもっとしっかり計画を立てて、一つ一つと実現していくんだ。」と、自分で自分に忠告しげまします。つまり、両親や友人のいうようなことを、自分で自分にいうので

す。

石川啄木の短歌にも、こんながありますよ。

*

何故かうかなさけなくなり

弱い心を何度も叱り

金かりに行く

*

「石川はふびんな奴だ」

(二)

ときにかう自分で言ひて

かなしみてみる

*

自分で自分を検討して叱ったり、自分で自分を上げましたりするときには、自分が二人いるのです。外から見ると現実の自分しかいませんが、実は頭の中に「もう一人の自分」が分離してそれとむかい合い、それと対話しているのです。たとえば、①「もう一人の自分」は過去の自分で、現実の自分がそれを批判します。

1 「おまえあのときだらしなかつたぞ。」

2 「わかつているよ。うつかりしていた。」

3 「いつでもうつかりして失敗するじゃないか。」

4 「わかつていても、なかなかおせないんだよ。」

5 「まだ努力がたりないんだ。」

6 「努力してこんどは成功してみせるよ。」

このような対話を、自問自答といいます。まず「もう一人の自分」を相手にしてそれに話しかけ、つぎにその「もう一人の自分」になって現実の自分に答えるというように、つぎつぎと立場を移しながら頭のなかの会話をすすめます。こうして問題の検討がすすみ、原因が明らかになり、どうしたらなおせるかもわかつていくというわけです。

こんどは、「もう一人の自分」が未来の自分で、現実の自分が未来の事態についてその答えを求める場合を見ましよう。山本周五郎の小説「こんち午の日」の主人公です。

*

「やれるか、あいつを相手に、やれるか」と塚次はもう一人の自分に云った。

「あのならず者と、やりあえるか」

塚次はもう一人の自分が首を振るのを感じた。とてもだめだ、できっこない。あつというまに天秤棒を奪い取られたときの、相手のすばしこさと腕力とが、ありありと思ひ出される。かなうものか、と塚次は思った。こんどこそ腕をへし折られるか、へたをすると殺されるだろう、とても、だめだ、と彼は首を振った。

*

これも、まず現実の自分が未来の「もう一人の自分」に話しかけ、つぎにその「もう一人の自分」になって答えています。②現実の自分の過去の生活経験が、「もう一人の自分」の判断の材料になって、とてもあのならず者にはかなわない、やり合えない、と首を振っています。これも立場を移しながら対話していくと、問題の検討がすすみ、結論が出てくるという例です。

(三浦 つとむ『いころことば』)

問一 石川啄木の短歌「何故かうかなさけなくなり／弱い心を何度も叱り／金かりに行く」の内容について、最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 金を借りるのなら、しっかりと計画をたてて、後々無理のないように借りようと思っている。

イ 金を貸してもらえそうな理由を思いついたので、不安な気持ちが消え去っている。

ウ すぐに金を借りようとする自分を変えようとして、気持ちをふるい立たせている。

エ 自分の弱い心を克服しようとするが、なかなかできず、金を借りようとしている。

問二 傍線部①「もう一人の自分」が話している言葉として、本文中の1～6の言葉の中で、当てはまるものには「○」を、当てはまらないものには「×」をつけなさい。

問三 傍線部②「現実の自分の過去の生活経験」とありますが、「塚次」の場合、どのような経験がそれにあてはまりますか。「という経験。」に続くよう、本文中から抜き出して答えなさい。

問四 次のア～エの文を読んで、本文の内容と合うものには「○」を、合わないものには「×」をそれぞれ記入しなさい。

ア 筆者は、「もう一人の自分」との対話により自己反省や自己激励が可能であると述べている。

イ 筆者は、自己反省や自己激励の例として石川啄木の二つの短歌を引用している。

ウ 筆者は、「もう一人の自分」と対話することで、時には混乱することもあると述べている。

エ 筆者は、問題の検討や解決のために「もう一人の自分」と対話することがあると述べている。

オ 筆者は、問題が解決しても「もう一人の自分」は活動を続けると述べている。